

紙上法話

「仏のいのち」

センター布教師 万福寺住職

翁 泰仙



私の自坊は吉備高原の南部の小さな谷あいにあります。い
うまでもなく過疎高齢の集落で、まさに限界あるいは消滅な
どと将来性や希望のまったくない形容で呼ばれる、そんな集
落です。

たしかに、お盆やお彼岸にお檀家を回りましても、老夫婦
かもしくは、一人暮らしのお年寄りが殆どで、若い世代は、
県南あたりに出たきり、帰る当てもないというのが現状です。

そうした中に、九十歳半ばで一人暮らしのお婆ちゃんがい
らっしゃいます。いつも私がお参りに行きますと、きまって
足腰の痛いことや、一人での生活が難儀であることなど、ひ
とときり愚痴めいたお話しをされるのですが、帰り際にはい
つも、「何時まで方丈さんに、こうして会えますか。」と言
って見送ってくださいます。これに対して、私のほうも「い
いや、お婆ちゃん何時までも元気でいてくださいよ。」と
答えるのが常でした。

そんなある年の柵縁に向いた時のこと、そのお婆ちゃん
は、私の姿を見るなり、私に向かっていきなり合掌して、「あ
あ有難い。こうしてまた方丈さんにお遣いすることができま
した。」と言われたのです。

私はその姿を目にするなり、眼からうるこが落ちる思いが
しました。その姿は、まさに自己への執着など微塵もない、
ただ生かされている命への感謝のきもちが、ひしひしと私に
伝わってくる瞬間でもありました。

九十年余もの人生は、紆余曲折の多い人生であったに違
ありません。その人生の、一コマ一コマを強く生き抜いてき
た上で、今この瞬間の命、つまり一息、一息がとも幸せで
あり、有難く思えるようになったのでしよう。

私たちは、常日頃から、たいていのことは自分の思惑通り
に制御できるこの身体や心、あるいは命までもがまるで自分
自身の所有物であるかのように振舞っています。そして、そ
れが思惑に沿わないときなど、腹を立て、愚痴をいい、また
ストレスという檻の中に閉じ込められて、いつの間にかもが
いています。

お婆ちゃんの姿は、自己というこだわりや認識を離れ、仏
の力に感謝しながら、一切を仏に任せ、「縁やすべての条件を
大切に受け止めながら、ありのままを生きなさいよ。」と、教
え諭してくれている菩薩のように見えました。